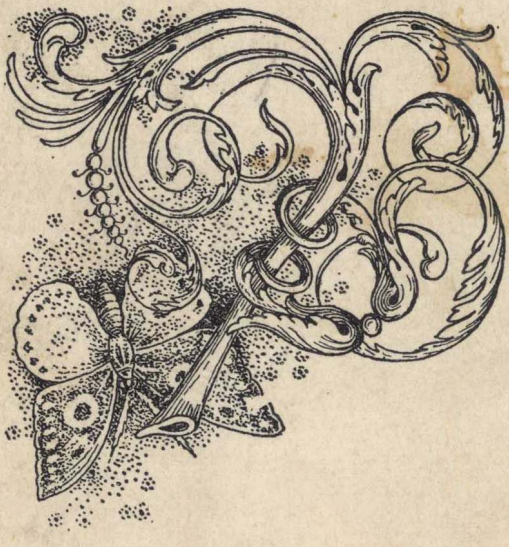

澤貧乏

森茉莉

新潮社

贅澤貧乏
一九六三年五月六日印刷
一九六三年五月十日發行
著者森茉莉
發行者佐藤亮一
發行所株式會社新潮社
東京都新宿區矢來町七一
電話東京三四一局七一一一
振替東京八〇八
塚田印刷、神田加藤製本
定價二七〇圓

裝幀・藤野一友
© 1963 Marie Mori
亂丁本はお取替へします。

贅澤貧乏

Ⅰ 贅澤貧乏 5
Ⅱ 紅い空の朝から…… 37
Ⅲ 黒猫ジュリエットの話 70
Ⅳ マリアはマリア 129
青い栗 171
あとがき 187

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

贅澤貧乏

贅澤貧乏

牟禮魔利（むれマリア）の部屋を細敍し始めたら、それは際限のないことである。

牟禮魔利は、自分の部屋の中のことに關しては、細心の注意を拂つてゐて、さうしてその結果に滿足し、獨り滿足の微笑（わら）ひを浮べてゐるのである。魔利の部屋にある物象といふ物象はすべて、魔利を滿足させるべき條件を完全に、具へてゐた。空罎の一つ、鉛筆一本、石鹼（シャボン）一つの色にも、絶對にかうでなくてはならぬといふ鐵則によつて選ばれてゐるので、花を吳れる人もないがたとへば貰つたり、紅茶茶碗、匙、洋盃（コップ）の類をもし人から貰つたとすると、それは捨てるか賣るより他に、なかつた。原因は魔利といふ人間が變つてゐるといふことの一事に盡きるが、それを幾らか解るやうに分解すると、次のやうになる。魔利は上に「赤」の

字がつく程度に貧乏なのだが、それでゐて魔利は貧乏臭さといふものを、心から嫌つてゐる。反對に贅澤と豪華との持つ色彩が、何より好きである。そこで魔利は貧寒なアパルトマンの六疊の部屋の中から、貧乏臭さといふものを根こそぎ追放し、それに代るに豪華な雰圍氣をとり入れることに、熱中してゐるのである。方法はすべて魔利獨特の遣り方であつて、見たところでは、何處が豪華なのか、判斷に苦しむわけである。見る人が藝術に關係する職業の人である場合は、樂しんでゐる部屋なのだな、といふことは解る。だが何處が豪華なのか、といふことになると、首を捻るよりない。魔利は、魔利を取り圍むもろもろの物象の中に横たはり、朝の光、睡りを誘ひ出す午後の明るさ、夜の燈火の、罪惡的な滅み、それぞれの中で、花と硝子と、菫を浮べて白く光る陶器。壁の、ボッチチェリ、ルッソオの畫に目を止め、陶醉の時刻を送つてゐるのだが、もし魔利が陶醉してゐるのだといふことを人が知つたら、その人間は（何處が陶醉？）と失笑し、而る後おもむろに魔利の顏をみて、魔利の精神狀態に懷疑を抱くに違ひない。

魔利が豪華の空氣を出す——魔利の目だけに映る幻の豪華である——方法には天井は關係なかつた。天井はあまり見ることはない處だし、煤が下つてゐても、魔利の豪華は傷つか

ないからで、あつた。四方の壁は淡黄が汚れて褐色をおびてゐるし、疊は番茶で染めたやうな色をして、ぼこついてゐるが、これらも魔利には關係が、なかつた。——疊の、椅子や卓子を置いてあるところには、藺草の色と鈍い赤との織り混ぜの上莫蓙が敷いてある。——魔利の經濟で疊を入れ替へるとすれば、最下等の疊であるが、安い青疊のけばだつた疊の匂ひなぞといふものは、貧乏臭さの最たるものである。壁も同じことで、淺草の安芝居の舞臺裝置よろしくの、うす青色の壁なんかに塗りかへた日には、これ又貧乏の匂ひで窒息すること受合ひである。これを書いてゐる今、硝子の壺の、薄綠の水垢を沈めた薄明りの中から、蛇が立ち上つたやうな恰好にそれぞれの形で延びてゐる、十本程の薄綠の太い莖の上に、濃紅色、黄みを帶びた薔薇色、ミルクを入れたやうに甘く白い紅、檸檬の黄、なぞのアネモオヌ

——アネモネのことである。それをアネモオヌと書くのは、何も佛蘭西語を知つてゐるといふことを見せる爲ではない。魔利の頭に巣喰つてゐる根深い歐羅巴の夢が、かういふことをさせるのである。魔利は小說を書く時にも、知つてゐるだけの佛蘭西語や伊太利語を總動員する癖がある。羅馬字を入れることもある。半頁に亙つて佛蘭西語の文章

を插入することもある。魔利が外國語を入れる精神が、暗々の内に通ずると見えて、かけだしの魔利のこの癖を、今までのところでは非難する人がない。魔利の父親の歐外にもこの癖があつたが、彼のには、魔利のと同じ理由の他に、多少のペダンチズムがあつたやうである。ペダンチズムは文章の中にある時、場合によつては美しいもので、惡いものとはきめられない。歐外をペダンチックな人間だとだけ言ふのは氣の毒である。歐外は高雅な趣味や、頭腦の中の、透(すきとほ)つた礦(かね)で拵へた微細な機械に似た動きを愉快がつてゐて、殆どそれに陶醉してゐた。それが彼のなんともいへない歡びであつて、その歡びが美しさを極めた文體になり、維納(ウヰンナ)の舞姫に扉の蔭からおくる、祕密な戀の微笑のやうな微笑になり、羅馬字なぞの插入になつたのである。歐外もまた、カカオの匂ひや、羅馬字の美を、根深いところで抱き締めてゐた男で、あつた。——

ところでアネモオヌが、硝子戸を透す薄暮の光の中に、今いつたやうなやうすで浮き上つてゐるのだが、その華麗な花束の左側の一部の背景になつてゐる壁の色が、汚れた淡黄であることが、魔利(マリア)の夢を壞さずにすんでゐるのである。アネモオヌの色は、魔利を古い時代の西歐の家に誘(いざな)つてゆき、花の向うの銀色の鍋、ヴェルモットの空罎の薄青、葡萄酒の罎の薄

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

白い透明、白い陶器の花瓶の縁に止まつてチラチラと燃えてゐる燈火の滴、それらの色は夢よりも弱く、幻よりも薄い、色といふものの影のやうにさへ、思はれる。魔利は陶然となり、文章を書くことも倦くなつてしまふのだ。

魔利はそんなわけで、天井と壁と疊は放つてある。魔利の部屋の中で第一に目立つてゐるのは、セミダブルの寢臺である。進駐軍の拂ひ下げ品で、小卓つきで三千五百圓といふ安ものだが、注文通りに薄汚れた、ニスを塗つた木製の寢臺は、なんの裝飾もなく、四角い面だけで厚めに出來てゐる。佛蘭西なぞの湖水のそばの家にある、彫刻をした胡桃製の寢臺が望めないとすれば、この寢臺以上のものは、魔利にとつては無い。何萬圓もする、家具商、又は百貨店の寢臺なぞを持ち込まれた日には、それこそ貧乏臭い新興階級の、新築した家の寢室と、讀みもしない本棚、いやな時計、手品師の布のやうな紅い絨氈なぞが、魔利の頭に浮んで來て、さういふ家の中の空虛な空間までが、流れ込んで來るに違ひない。味けない、無色なものが魔利の舌の上に擴がつて來る。さうなれば魔利の夢は完全に壞れてしまふのだ。寢臺の上の厚く重ねた蒲團は、厚地の布で包んである。白地に紅色の細い二本縞の木綿である。この敷布も、アラビヤの豪族の寢臺に敷かれてゐる、——例の四隅に槍を立てたもので

ある――白い荒い布に、黄金色の絲で縫つた星があつたり、太陽の模樣なぞが紅や黑で縫つてあつたりする布が購入不可能だとすれば、魔利にはこの布より他に採用するものはないのである。上に掛ける蒲團は二枚あるが、下に掛ける夜具は、橄欖地に薄い褐色で極細い模樣のある木綿で、袖や裾に折返つてゐる裏は淡黃である。裏地と同じ色の上蒲團は、二度洗つたために、魔利の理想の淡いカナリア色になつてゐる。魔利はこの橄欖色に細い褐色の柄と、淡黃の色とでこの部屋の中に、ボッチチェリの宗教畫にある色調を攝り入れてゐるのである。枕は白いところに太い紅縞の、これも木綿である。魔利はボッチチェリの蒲團に體を埋めて花を視、硝子に視入るのである。あらゆる硝子の色、どれほど見てゐても解り得ない不確かな溶暗が、魔利を誘惑し、そこに魔利の至上の天國が、誕生する。夏になつて、上の蒲團を藏ひ、白に紅の縞の蔽ひだけになつた寢臺に横たはつてゐる魔利は、暑熱で蒸される晝も、闇に取り圍まれる夜も、さうしてゐながら窗の向うに沙漠の靜寂を、想つてゐる。「ピエエル・ロチの手紙」が、魔利に感動を遺した、夜の沙漠の冷えた砂が、空想の暗いフィルムの上に映つて來て、アルジェリアの女の歌ふ戀の歌さへ聽えて來るのである。寢臺の兩側には一つ宛、對の肱掛椅子が置かれてゐる。奥の壁際にある方は、物を乘せる臺になつてゐる。

人間の掛ける方の椅子には、茶の濃淡の更紗木綿の炬燵蒲團が四つ折りにして敷いてある。椅子の背には、ヴェニスの町の運河と橋を織り出した壁掛けが掛けてあるが、この壁掛けが魔利の目には、巴里の豪華な部屋にあるゴブラン織に映つてゐて、反對側の壁に張られたボッチチェリの「春」（プリマヴェラ）の部分畫、ルネサンス以前の、貴族の女の横顔、なぞと呼應して、魔利の部屋の中に伊太利の色を漂はせてゐるのである。澁谷にある小さな店の壁に、これが張りつけられてゐるのを發見した時、魔利は欣喜雀躍した。誰も買はない爲に、大分長い間店晒しになつてゐたとみえて、大體が何かの西洋の畫から取つたもので、もとの色がいいのだが、それが陽にやけていい具合に褪せてゐる。その朧ろな橄欖（オリイヴ）色や鈍い黄色の濃淡、水灰色、柔かな煉瓦色なぞの色調は、古いゴブラン織に寸分違はない。氣に入つたものを見附けると我を忘れる魔利である。大分剝げてゐるから値を引けなぞといふ驅け引きを思ひつく筈はないので、喜色滿面で、それを買つた。何かの必要があつて買ふのは解るが、又百貨店なぞにあるものは高價で手が出ないのでこれを買ふ、といふのも解るが、色が剝げてゐると自分で言つてゐながら喜色滿面なのが解（げ）しかねる。さういつた心持が店員の顔に表れるのである。そんな時一種の笑ひが男の顔の上を掠める。魔利のすることの中には、魔利以外の人間から薄

ら笑ひをひき出すものが、事實多々あるので、魔利は人々の笑ひを視角の端に捉へることに馴れつこになつてもゐるし、平氣でもある。若い時には腹を立てたが、どうやら大人の神經を持つて來た此頃では、笑ふ方に同情をしてゐる。

寢臺の枕元の卓の上にあつて、不思議な豪華を照らしてゐる燭臺は、銅だか鐵だか、もろもろの合金だか解らないが、ともかくも礦は礦で、伊太利の美術館にある銅版畫のやうな色をしてゐる。翅をつけた天使の若者が、少女を抱いて踊つてゐる彫刻がしてある。安ものによくある、兩面の型に流しこんで合はせたものだが、額緣屋、又は一寸氣の利いた文房具店、百貨店なぞにある、ミレエの晩鐘や、阿呆のやうなベエトオヴェン、水車小屋、なぞの厭味はなく、魔利の夢を充分に滿たしてゐるのである。もう大分古くなるので、電球を差し込む所と臺との繼ぎ目の盤陀が剝れて首がぐらぐらする。そこで一杯に引つ張つたコードの上に、トリスの大瓶に水を入れたものが重しに、置いてある。魔利の部屋を訪問する少女や奥さんは、この危いコードで苦勞するのである。魔利自身も困つてゐるが、伊太利を想ひ出させるやうなものがたやすく見附かるとは思へないので、この危い裝置を魔利は永遠に續ける積りでゐる。他人には氣になることに違ひないので、（五百圓も出せばあるわ、買つて上げませ

う。）と言ふ人もある。理由を説明すれば愕くから、魔利は妙な笑ひを浮べて、（その内買ふわ、唯億劫なのよ。）と言ひ、あやまるやうにして、その話を外らさうとするのである。八百圓で買つて八年間保たせてゐる。このみすぼらしい燭臺は、魔利には一つの財産なのであつて、これを見てゐると、「羅馬に行きしことある人は、かのピアッツァ・バルベリイニを、知りたるべし。」といふ、あの卽興詩人の最初の言葉が浮んで來る。さうして、羅馬やフィレンツェの街の敷石の上に轟いてゐた、馬車の轍の音も、魔利の耳には聽えて來るのである。花瓣を上向けてゐるアネモオヌの深い皿。咲いてゐることにもう倦きてゐるやうな、物憂い薔薇色、黃色、ミルクを含んだ橙、濃紅。アネモオヌの美女達は、この天使のついた燭臺の光の中でこそ、魔利に深い夜の夢を、見せるのだ。

寢臺の後の壁に附けて置かれた書棚の上は、魔利の部屋——實際には部屋ともいへないが、魔利にとつては美しい、夢の部屋である。《現實。それは「哀しみ」の異名、である。空想の中でだけ、人々は幸福と一しよだ。私は現實の中でも幸福だ、といふ人があるかも知れないが、さういふ人は何處かで、思ひ違ひをしてゐる。現實に幸福な人間が幸福を感じる時、その幸福感は、その人間の空想の部分の中に、少くとも空想の混りあ

つた所に、存在してゐるのであつて、決して現實そのものの中には存在しないのである。正確に、現實の中だけで幸福だ、と言ふ人があれば、それは遠い祖先の猿から、あまり進歩してゐない人である》。魔利は偉い哲學者になつたやうな顔をして、心の中で言ふのである。室生犀星の「女ひと」の中に、「ビフテキの薔薇色と脂」といふ言葉がある。その言葉を讀んで以來、ビフテキといふものを考へる時、魔利の頭にその言葉が、浮んでくる。ビフテキをナイフで切つてたべるといふことは「現實」であり、ビフテキ自身も「現實」であるが、ビフテキを美味しいと思ひ、樂しいと思ふ心の中にはあの焦げ色の艶、牛酪（バタア）の匂ひの絡みつき、幾らかの血が滲む薔薇色、なぞの交響樂があり、豪華な宴會の幻想もある。又は深い森を後（うしろ）にした西歐の別莊の、薪の爆（は）ぜる音、傍（かたはら）で奏する古典の音樂の、靜寂なひびき、もあるのである。ある男が、埴輪（はにわ）のやうな土の人形を愛する時、その愛情は生きてゐる女への愛情より深いのかも、知れない。ある男の娘への愛情は、或時からは、その妻への愛情より深いかも、知れない。愛情や、樂しさが、現實だけのものなら、現實のもう一つ奥に、何かが隱れてゐることはない筈である。魔利は何とかして、自分の頭の中にある夢の部屋の存在（エキヂスタンス）を、正當化しようとして、こんな意

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo